

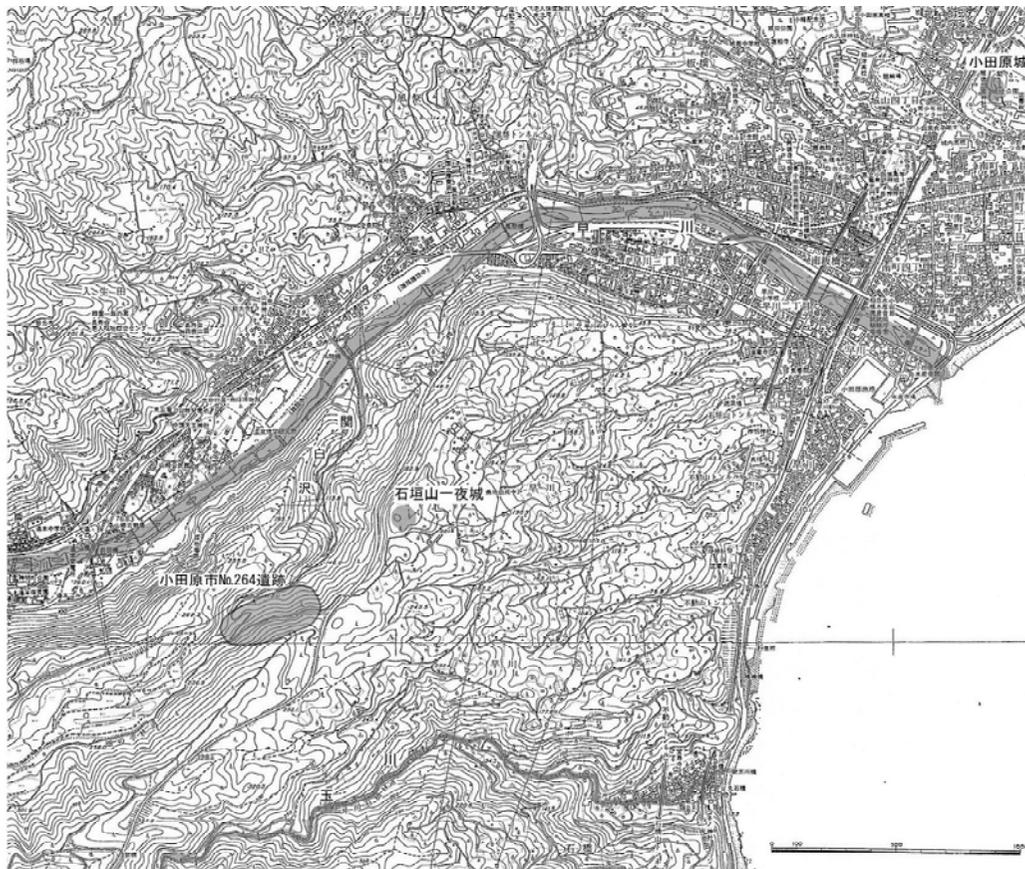
◇江戸遺跡研究会第106回特別例会は、2006年7月16日(日)午後1時00分より江戸東京博物館学習◇
◇室にて行われ、三瓶裕司氏、榑崎修一郎氏、川口武彦・関口慶久氏、小坂井孝修氏より、以下◇
◇の内容が報告されました。◇

神奈川県小田原市 (仮)早川石切丁場群の調査

三瓶裕司・依田亮一・新開基史

(かながわ考古学財団)

所在地 神奈川県小田原市早川地内
調査期間 一次調査：2005年9月1日～11月30日
二次調査：2006年2月1日～3月15日
調査面積 3260.4㎡
調査機関 財団法人 かながわ考古学財団
担当者 三瓶裕司、依田亮一(一次調査)・新開基史(二次調査)



第1図 遺跡位置図

遺跡概要 神奈川県西湘地域県政総合センター農政部広域農道課では、広域農道整備事業(小田原湯河原線)を計画・推進している。計画路線には(仮)早川石切丁場群(小田原市No.264遺跡)が含まれており、今回計画路線にかかる範囲9500㎡のうち、県教育委員会による事前の分布調査によって確定した3260.4㎡について調査を実施した。

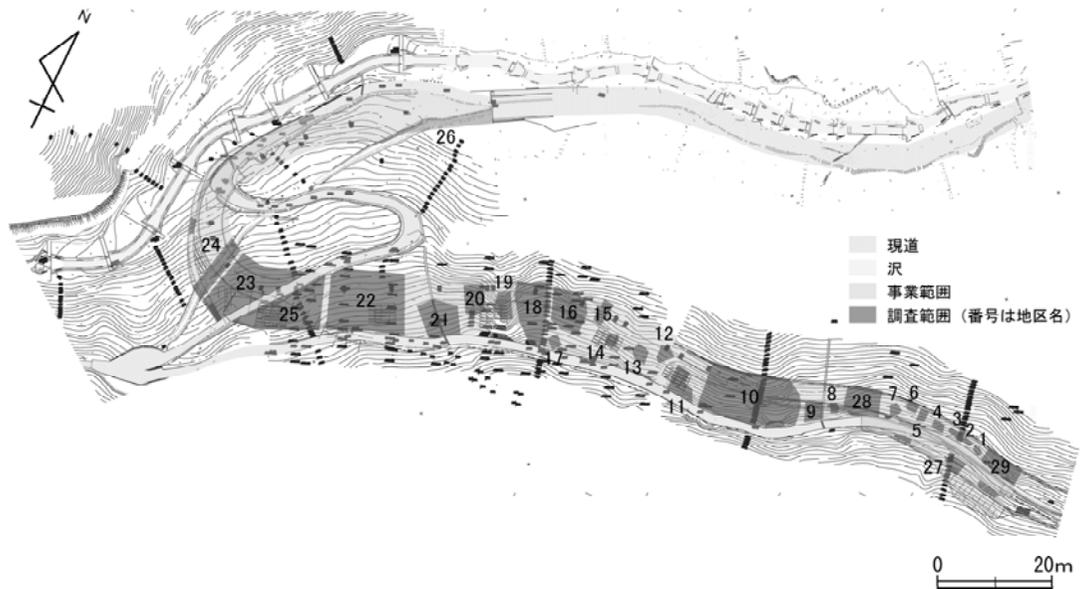
本遺跡は箱根登山鉄道入生田駅の南方、約1.2kmに所在する標高180から250mの箱根外輪山の山腹に立地する。地形的には、早川に注ぐ沢(関白沢)によって深く開析された谷を形成する北向きの急斜面上に形成されている。

これまで石切丁場については、安山岩を産する伊豆半島から箱根山塊まで分布するということや小田原市内においても石切に関わる刻印等の発見などその存在については知られていた。そのような中本遺跡は、2002年に小田原市教育委員会によって埋蔵文化財の包蔵地として登録され、神奈川県下においてもはじめて石切丁場が生産地遺跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録・周知化された遺跡である。

調査概要 発掘調査は、工事の施工時期が平成18年度に予定されている中央付近の範囲(9区～17区)と、その両側に広がる平成17年度中に工事が施工される範囲(1区～8区、18区～29区)の範囲に区分し、前者を二次、後者を一次として調査を行なった。

一次調査 角石をはじめとする各種切石を切り出そうとする状況を示す作業場(22区)や、切石が作出できそうな大形の石材は一切見られず、切出しや粗整形時にうち捨てられたコップや分割礫のみが残されている石の切出し作業が終了した状況を示す作業場跡などを検出した(23・25区)。また、調査範囲の西端には等高線に斜行するように山肌を掘りくぼめて構築された道状遺構(24・26区)が発見されている。

二次調査 丁場の中でさまざまな作業が行なわれている状況を示す範囲(9～11区)を中心に調査した。そこでは石を切り出すため、自然石に矢穴をうがった状況を示す切出し場、切り出した石の粗整形を行なっている作業場などが発見された。出土した切石には様々な刻印が穿たれており、切石の接合関係から刻印を刻んだ時期に時間差が見られるものも確認されている。また、転石から切石



第2図 調査範囲設定図

を作出した段階で作業を休止したかのような様相を示す範囲(16区)を検出した。ここで発見した切石は全て接合関係にあることが判明している。

切石以外の遺物出土は一次、二次を通して非常に少なく、広範囲にわたって様々な作業工程を指し示すようないくつもの石切作業を行なった場や関連施設と思われる遺構が発見されたにもかかわらず、石切丁場の運営年代を確定させる遺物の発見には到らなかった。

遺 構

石切丁場 代表的な石切丁場としては、切出し作業の最中に遺棄されたような様相を呈する9～11区(幅約30m、高低差約20mの谷状地形の中に無数の切石やその製作剥片が出土している：PL. 1)や、22・23・25区のようにあらかた石切作業が終了し、必要な切石についてはすでに搬出が終了しているような様相を示す状況(切出しや整形に失敗した石が取り残されている状況や切石の製作時に不要なものとして分割され打ち捨てられた礫片や、切石の整形や矢穴を作出した際副産物として作出される剥片など、その状態以降使用に耐えない石のみが残されている)、また、ほぼ切石の状態まで仕上げ小口面に刻印まで穿った段階で遺棄されたと見られる16区なども注目される。



PL. 1 10区石切丁場全景(左奥:矢穴を穿った母岩、中央:整形途中の切石、左手前:整形後の切石)



PL. 2 16区石切丁場



PL. 3 22区石切丁場(角石製作途上か)

道状遺構 調査範囲の西側(No.24・26)において検出した。急な山の斜面に対し、斜めに3～4mほどの幅を持つ溝を掘り、山体の傾斜に対しやや緩い傾斜角を持つ道につくりあげていることが見て取れる。

道路面にはさらに2本の溝が掘りくぼめられていた。それぞれの溝の幅はおおよそ30cmを測り、溝同士の幅は1.5mを測る。それぞれの溝の覆土中には、小転礫や切石を割ったときに出た、細かな剥片類が充填されていた様子が観察された(PL. 4)。



PL. 4 24区 道状遺構(完掘)

刻印など 今回の調査で認められた刻印は「八」、「〇」の中に「+」、「〇」の中に「寸」(PL. 5)の3種である。また、金石文と言って良いものか、自然面に「此左口」という文字が確認された(PL. 6)。これは未完で放棄されており、「此左」まで刻み、3文字目に取り掛かった段階で取りやめている。その先何を示そうとしたのか、なぜ作業をやめたのかなどについては不明である。



PL. 5 11区 刻印「〇」の中に「寸」



PL. 6 21区 金石文? 「此左口」

矢 穴 本遺跡で観察された矢穴の大きさには、ばらつきが見られないということが特筆される。

矢穴の底の形状には、台形状、U字上、コ字状などバラエティーを見せるが、こと大きさについては、調査範囲を通して7～8cmの長さを持ち、矢穴と矢穴の間隔にはおおよそ3cm前後の間隔をもつもので占められることが観察された。



PL. 7 4区 矢穴

ま と め

今回の調査では、29ヶ所にわたる調査範囲を設定し発掘調査を行なった。調査の結果、現状では出土品整理作業を行っていないため、詳細な検討は加えていないものの、切石・コップなどの様

相、刻印の分布状況などから、石切丁場としては4ヶ所程度の作業単位にまとまる可能性が考えられる。

一方、切石の作業工程では、①自然石に唾付けを示す刻印、②自然石に下取り線や矢穴を穿った状態、③切石への分割状態、④粗整形を行った状態、⑤小口面に、刻印をうがった状態、⑥搬出待機状態、⑦精整形を行なった状態、などが調査範囲内で観察することが出来た。中でも10・11区では、①から⑥にかけての一連の作業が同一の作業場空間において観察できたことは特筆できる。

また、調査範囲の西端、24区・26区とした範囲から検出した道状遺構は、底部に2本の掘り込みが作られ、その中にコッパ石や小さな転石などが充填されていることが観察された。これは石を運び出す際、地車のワダチとなる部分をあらかじめ舗装していたものとし、この遺構は切出した石を運び出す石曳き(石引き)道である可能性が高いのではという考え方が示されている。

いずれにせよ本遺跡の抱える様々な問題については現段階では不明な点が多い。今後の出土品整理を通して文献等の関連する資料調査を進め、解明することができればと考えている。

参考文献

内田 清 2001 「足柄・小田原産の江戸城石垣石－加藤肥後守石場から献上石図屏風まで」『小田原市郷土文化館研究報告』No.37 小田原市郷土文化館 p. p. 1-20

上 郷 岡 原 遺 跡

－天明三年の浅間山泥流に埋もれた麻畑・水田・家屋－

榎崎 修一郎

(財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団)

はじめに

上郷岡原遺跡は、群馬県東吾妻町三島に所在し、吾妻川の右岸に位置する。八ッ場ダム建設工事に伴い、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が2001(平成13)年から実施されており、現在も継続調査中である。これまでの調査で、主な面は天明3(1783)年の浅間山泥流に埋もれた面・平安時代の竪穴住居を中心とする面・縄文時代の竪穴住居及び陥し穴を中心とする面の3面に分かれている。ただし、平成14(2002)年度の調査では、さらに天明3年の浅間山泥流面の下に中近世の掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑墓等が検出されている。ここでは、2002(平成14)年度に調査され、天明三年の浅間山泥流に埋もれた面から検出された麻畑・水田・家屋についてのみ報告する。調査成果の一部は、すでに発表済みであるので参照されたい(榎崎, 2003a・2003b・2003c)。なお、本遺跡の2002(平成14)年度調査成果は、現在、本報告者により報告書としてまとめられている過程であり、2007(平成19)年3月には(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団から刊行の予定である。